

目 次

・ 4月例会報告	1
・ 5月例会報告	8
・ 6月例会報告	9
・ 川祭り与世界平和	10
・ 京都大学原子炉実験室 小出裕章氏の講演を聞いて	12
・ ジャコウアゲハ	15
・ 千年椿	16
・ 父の誕生日	18
・ 母の夢	21
・ 短歌	23
・ 不思議な体験	24
・ 雑感	25

4月例会報告

4月1日(火)宇和島の『木屋旅館』見学を4月の例会活動として出かけることになりました。午前9時中央公民館集合、参加者6名HさんTさんの車2台に分かれ出発。天気にも恵まれ満開の桜を車窓から楽しみながら川内～宇和島まで高速道路をトラブルも無く約1時間30分で第一目的地、道の駅「きさいや広場」無事到着。こちらでガイドマップを調達し、『木屋旅館』の見学は午後1時からなので昼食の前に国指定 名勝「天赦園」へ。

寛文12年(1672)宇和島藩二代藩主宗利が造成した浜御殿の一部南東部を、七代藩主宗紀(号:春山)が隠居の場所として大改造を行い慶応2年(1866)に竣工しこれを天赦園と命名、命名の由来は伊達政宗が退隠後群臣に示した述懐である。「馬上に少年過ぎ 世は平にして白髪多し 残軀は天の赦する所 楽しまずんば是れを如何せん」という漢詩から採って命名したものである。面積は11240㎡、池泉廻遊庭園で【潜淵館】春山が茶道を楽しんだ書院式茶室【春雨亭】愛書家としても有名な春山は余生を楽しみながらこの書屋で書道を研鑽し多くの貴重な書を残した。また、釘が使用されていない構造の貴重な建物。これらの建物が点在している。見所は、

*伊達家の先祖が藤原鎌足であるところから藤原氏のゆかりをしのび、園内に6基の藤棚を設置、入口正面を飾る紫野田藤、池上にかかる白玉“上り藤”などが咲き誇り春の盛りをしのばせる。

*七代春山が、伊達家の家紋「竹に雀」にちなみ竹を愛し、園内には19種類の竹や笹が植栽されている(金明竹・孟宗竹黒竹・四方竹・亀甲竹・泰山竹・蓬萊竹・熊笹・オカメ笹など)

*九代藩主宗徳遺愛の花菖蒲は、明治30年ころ東京・岡山・佐賀・熊本の各旧藩邸より集めた純日本種で6月上旬には満開する。

天赦園パンフレットより

残念ながら藤や花菖蒲を見ることはできませんでしたが、名残の椿や数種の桜、立派な赤松などを楽しみながら廻遊庭園を11時30分頃まで巡り、少し早めの昼食をとるため天赦園を後にしました。※4月12日愛媛新聞「水面映すかれんアーチ ノボリフジ見頃」の記事と写真を見てチョッピリ残念感。

昼食は宇和島の郷土料理店「はずみ亭」へ。何度か宇和島を訪れた際立ち寄った店で宇和島風鯛飯（鯛の刺身を生卵とタレをまぜて温かい御飯にかけ）が私のお勧めランチとしてご案内しました。奥の掘コタツ席に通されそれぞれ好みの定食をゆっくり頂いた。ちなみに10数年振りに鯛飯を頂いたのだが、さすが鯛の刺身（皮付きの刺身）の歯応えはそのままだったが、以前よりも甘口の味付けになったような感じ。私の味覚が変わったのか？我が家流ですが鯛の刺身を買ってよく食卓に上る簡単メニューです（帰りに再度立ち寄った「きさいや広場」でははずみ亭の鯛飯が冷凍で販売されていたので家族と味の違いを確かめようと購入、後日食べてみてこちらの方が以前の味に近い感じがした。

店の隣にある「高野長英の隠れ家」を外から見学。2年ほど前に整備し直した様で隠れ家らしさは余り感じられ無い。以前、整備した松山の「一草庵」を訪れた時の光景が浮かんだ。

車で5分弱、本日の目的の場所「木屋旅館」へ。かつてのたたずまいをそのまま受け継ぎながらもモダンな姿は周辺景観とは全く違った空気観。マネージャーであるのポーランド生れのグレブ・バルトロメウスさん（親しみを込めてバルさんと呼ばせていただきます）・千佳江さん夫妻が表で出迎えて下さった。黒地に白抜きのネームが印された半纏風のユニフォームがお洒落で良く似合っていた。

早速館内へ。入り口から一步足を踏み入れた途端、磨き上げられ黒光りした古い材と白壁が醸し出す雰囲気や1階のロビーから上を見上げると2階の亚克力板の透明な床を透して見える屋根の梁に圧倒され、これから始まる館内見学への期待が高まる。

木屋旅館は明治44(1911)年創業。政治家では後藤新平、犬養毅、作家では司馬遼太郎、吉村昭、五木寛之のほか、国語学者金田一春彦らが宿泊した。しかし、平成7(1995)年惜しまれつつ廃業。その後、宇和島市が購入し、いちぶを宇和島市観光協会が一部を借り入れ自転車タクシーの待合所として活用した時期もあったが、建物の希少性を知る人々は「やはり旅館として残したい」との思いを募らせた。そこで平成23年に地元の有志46人で設立した合同会社が旅館として運営を行う「木屋旅館再生プロジェクト」が立上がり、

平成24年春、新しいスタイルの旅館として再生された。

木屋旅館のホームページには「上品で『アートエンターテイメント』の空間というアプローチで、心地のよい『ほったらかし感』の中で、滞在中飽きさせない工夫を凝らしたしつらえを随所に施しました。滞在者が木屋旅館一棟を最小2名～最大8名まで1組限定で借り切り、ありったけ自由に建物を楽しんで頂くスタイルです。」とある。

1階に1部屋、2階に3部屋のゲストルームとリビングルームがあり、宿泊客はどこで寝ても、どこでくつろいでもよい。部屋の間仕切り部分にしつらえられた欄間には部屋毎に花・籠・茶道具など違った彫りがなされ、部屋毎に使われている材の種類を違えるなど思考をこらした部屋には見所が一杯。廊下から眺められる中庭は薬師谷溪谷を模し、奇岩や木々が織り成す情景が心を和ませてくれる。中でも、司馬遼太郎や吉村昭が宿泊した部屋はライブラリーになっている。創業当時から使われていたであろう黒壇の文机をセンターテーブルに、スチールフレームに革を張った現代風の椅子が配置されていて、この部屋で読書をしたり、思索にふけったりと穏やかなひとときを満喫することができる。長身のバルさんには昔の日本人サイズに作られた敷居は低く、おでこを打ちはしないかとひやひやしたが上手にくぐり抜けるしぐさは堂に入っていた。

歴史ある木屋旅館と現代アートとの混ぜ合わせ出来た『新生木屋旅館』の代表格が透明の床で、2階客室の四畳半程の透明の床スペースにスクリーンを下ろすと大きな行燈になる仕組みになっており照明(LED)の色を変えることもでき異なった雰囲気味わえる。ガラス窓を透した灯が木屋旅館全体を幻想的な雰囲気に包まれ外の景観をもアートな空間に変えてしまう。(パンフレットや紹介写真でも照明に彩られた外から見た木屋旅館が多く印象的である。トイレや洗面所などはホテルのようなモダンな雰囲気女性にも好評。

戸や窓に使われている透明ガラスやスリガラスも創業当時の物が多く使われ模様が施されたスリガラスなどレトロ感が無理なくマッチしている。

浴室は一部に昔のタイルをあしらい現代的なデザインへとリフォーム。この宿の湯は昭和63年に宿泊した五木寛之氏のエッセイ『流されゆく日々』の中でも称賛されている。

バルさんらスタッフは、宿泊客に館内を案内したり会話を楽しんだりはするが、細々と世話を焼く旅館的なおもてなしはしない。食事を用意したらお客様はずっと宿に閉じこもりになってしまう。伊達の文化が根付いたこの町にもっと親しんでほしいとの願いから、町をぶらぶら歩いて商店で惣菜を買って持ち込んでもいいし、地元の人たちが通う飲食店に出かけてもいい。そうすることで町の文化に触れ地元の人々と触れ合う事ができる。その関わりこそが旅の醍醐味、お勧めのお店を聞かれたら観光情報紙に載っていない穴場を紹介してくれる。朝食に関してはパン・ジュースなどの軽食を用意してくれるそうだ。

木屋旅館の再生プロジェクトは地元の宝物を掘り起こし新たな魅力をプラスして広く発信していくものだ。もともと宇和島にある産業や自然、風物にもスポットを当て独自のプランをつくりあげることにも力を入れている。

* 地元真珠養殖場の見学や真珠に関するセミナーを盛り込んだプラン

* 滑床溪谷のキャニオニング（溪谷を探索したり溪流滑りを楽しんだりするスポーツ）

* 宇和海での釣りなどのプラン

*（案）手描き、手染めで鯉のぼりを作っている工房を見学し手染め体験プラン・宇和島伊達家の菩提時である等覚寺や枯山水の庭園が美しい西江寺散策プランなど自分自身が“宇和島通”になってどんどん提案をしたいとバルさんは瞳を輝かせる。

こうして地元の人達との触れ合いがリピート客を生み出し宇和島ファンがじわじわ増えてきている。また、英語で書かれた旅行ガイドブックとしては世界一のシェアを誇る『ロンリープラネット』にも紹介されるなどインパウント観光（訪日観光旅行）にも弾みが付いてきている。

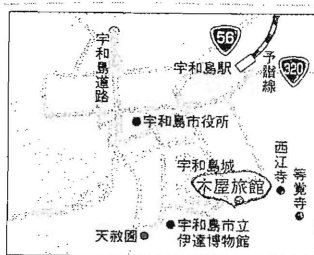
エアコンの設置はされているが木造の建物、さすがに冬の寒さは厳しいそうだ。宿泊も暖かい季節がお勧めの様な気がする。くらしの学習会で合宿がたら宿泊する企画が出来たらいいなと思った。

また、木屋旅館を単に旅人を迎え入れるための施設としてだけでなく、地元の人達にも日常的に活用し、楽しんでもらいたいと、建物一階にショップ&カフェスペースを設け市民がふらりと立ち寄り気軽に利用できるサロンと

して人気（現在カフェスペースは木屋旅館所蔵の書画の掛け軸や置物などを展示するギャラリーとして利用されている）ショップには、オリジナル商品・南予地方の特産品などを販売。この日、各自好みの商品を家族や自分への御土産として購入した。バルさん個人として地元の方に親しみをもってもらえるようにと英語通訳ボランティアへの英語指導など地域の様々な活動に積極的に参加している。館内を案内してくれる言葉はもちろん日本語、きちんと丁寧に分かりやすく質問にも端的に答えてくれる。お客様を迎える心のこもった言葉は英語・ドイツ語の通訳の仕事にもプラス効果になる気がした。バルさんが日本語教育を初めて受けた先生（因みにくらしの学習会のリーダーでもあるHさんが先生だったそうだ）にきちんと習い、それを忠実に実践し、今のお客様を迎えるためのより磨きのかかった日本語を話す努力もあり（南予弁のアクセントがチラッと出るところなどは暖かみを感じた）美しい日本語が身に付いたのだと思った。

こうして見学を終え外へ。昔は柳の木が植えられ風情を感じられる通りだったそうだが、今は柳に代わり黒地に白抜きのネームが印された二枚の幕が創業当時の門灯と共に『新生木屋旅館』の顔となっている。建物をバックに記念写真を撮らせて頂き、バルさんおすすめ手作りクッキーが美味しいお隣にある喫茶店でコーヒープレイクをし、名残を惜しみつつスタッフの皆さんに見送られ木屋旅館を後にした。館内案内、本当にありがとうございました。

その後、再度「きさいや広場」へ。ロイズのチョコレート・南予風鯛飯の素・南予銘菓・じゃこ天（宇和島にある各店舗の物があるのかと思っていたが種類の少なさにガッカリ）など好みの物を購入し、帰路に就いた。集場所でもあった東温市中央公民館へ16時30分無事到着。長時間運転して下さったHさん・Tさんお疲れ様でした。そしてありがとうございました。（A.Ⅲ）※活動報告の資料として四国電力広報部発行「ライト&ライフNO.632」宇和島をリードする大人の情報紙「きずな NO.26」を使わせて頂きました。※



◎木屋旅館

宇和島市本町追手2-8-2

☎0895-22-0101

1泊施設使用料(2名～8名で1棟貸切)

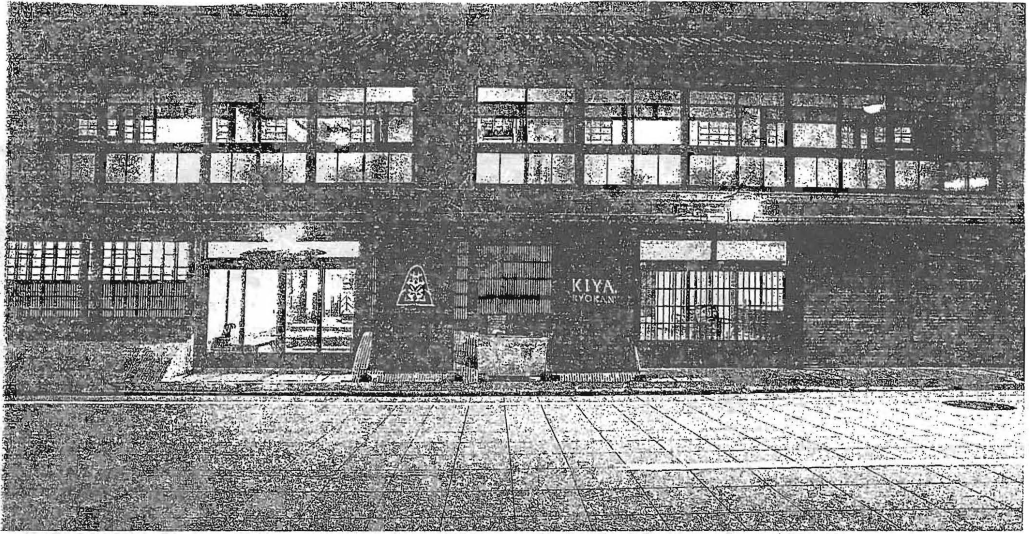
21,600円+1名につき5,400円(朝食付き)

<http://kiyaryokan.com/>

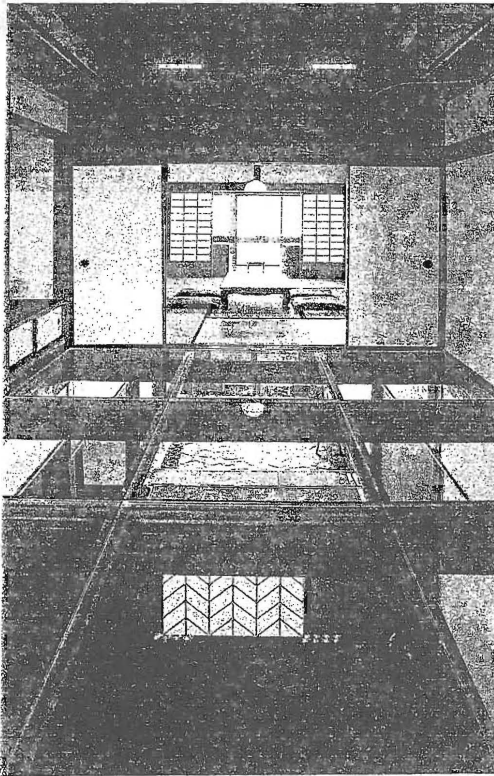
※宿泊客がない時であれば館内の見学も

受け付けているのでその際は必ずご予約を※

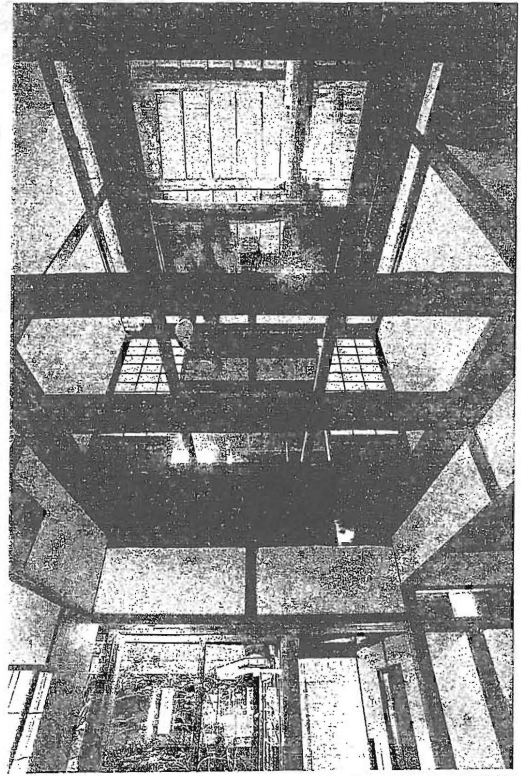
※2014年6月12日（木）NHK『あさイチ』で「木屋旅館」が紹介されました。全国版での放送に、つい嬉しくなって録画をしてしまいました。※



かつてのたたずまいをそのまま受け継ぎながらもモダンな姿をみせる現在の木屋旅館。夜は2階の照明により幻想的な雰囲気を演出



2階のアクリル板の透明な床から1階を見ることができる。宿泊客はここに布団を敷いて寝ることもできる。特に子どもは大喜びする仕掛けだ



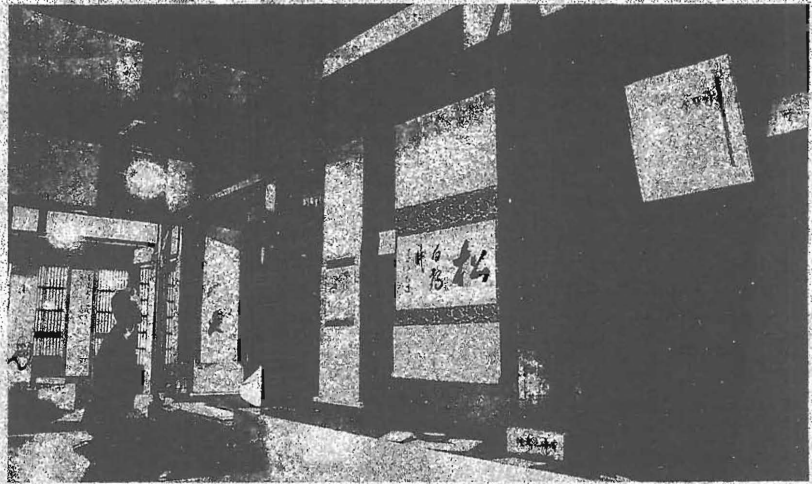
ロビーから2階を見上げるとアクリル板により屋根の梁まで見える。2階の照明は色を変えることができ、その変化で異なった雰囲気味わえる



木屋旅館とマネージャーのグレブ・バルトロメウスさん・千佳江さん夫妻

4月例会で訪れた宇和島の木屋旅館のことが6月13日の愛媛新聞に載っていました。4月には国の有形文化財に登録されています。

宿の美術品膨らむ想像
宇和島 木屋旅館で所蔵品展
 4月末に国の有形文 された宇和島市本町追
 化財（建築物）に登録 手2丁目の木屋旅館本



落ち着いた雰囲気旅館内で開催されている記念展

館で、所蔵する掛け軸
 やびょうぶを披露する
 記念展が開かれてい
 る。30日まで。

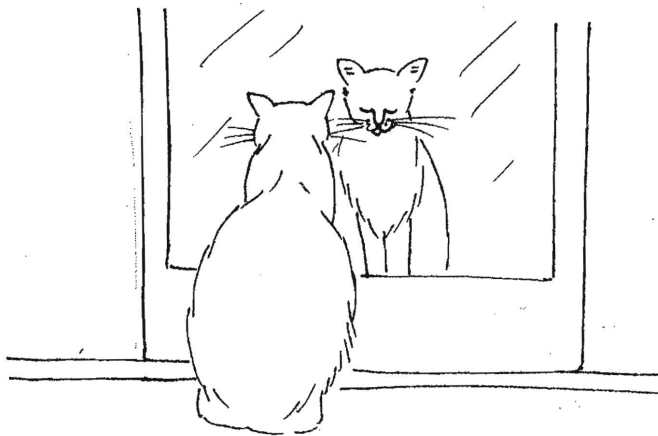
木屋旅館は1911
 年に創業した商人宿
 で、司馬遼太郎や吉村
 昭ら多くの文人に愛さ
 れたことで知られる。
 95年に廃業したが、そ
 の後、市が購入し改修。
 2012年に滞在型の
 観光拠点として営業を
 再開した。13年11月に
 は国の文化審議会が、
 有形文化財に登録する
 よう文部科学相に答申
 していた。

今回の展示は、通常
 は別館に保存されてい
 る約100点の美術品
 の一部。宇和島藩7代
 藩主伊達宗紀の書や司
 馬が元オナーに贈っ
 た色紙、西予市野村町
 出身で大正時代を中心
 に活躍した画家松本仙

芋が鬼ヶ城山を描いた
 掛け軸など、約20点が
 落ち着いた雰囲気旅館の建
 物に溶け込んでいる。

木屋旅館マネジャー
 のグレブ・バルトロメ
 ウスさんは「本物が偽
 物か定かでないものも
 あるが、どという経緯
 でこの宿に残っている
 のか、物語を想像する
 のもおもしろい。この
 機会に足を運んでほし
 い」と呼び掛けた。

（山本憲太郎）



5月例会 西条火力発電所見学

K. K

5月13日、西条市にある四国電力火力発電所を見学しました。

午前8時40分に中央公民館に集合、参加者は5名、1台の車でいつものように賑やかに出発して、1時間ほどで発電所に到着しました。

受付で参加人数、目的、出入時刻を記入した後、広報室に案内されました。そこで発電所の方から概要説明がありました。以下その概略

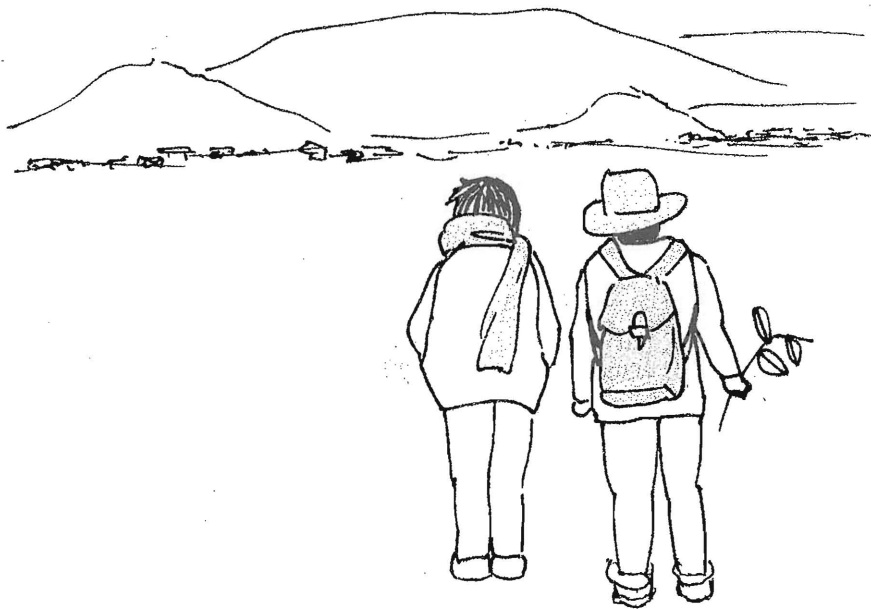
- ・西条発電所は昭和40年代に石油を燃料とする火力発電所として建設された。
- ・昭和56年からは安価で埋蔵量の多い石炭燃料に切り替えていて、現在はそれに木質バイオマス（間伐材の木くず）も一部加えている。
- ・石炭は主にオーストラリアから輸入している。
- ・運ばれてきた石炭はいったん貯炭サイロに備蓄（常時10日分）
- ・ボイラーでは石炭は粉末状にして燃やしている。
- ・発電規模は2基合計で40万6千キロワット。ちなみに四国全体では火力発電所4か所で379万7千キロワット、水力発電所58か所で114万2千キロワット、原子力発電所1か所で202万2千キロワット、新エネルギー発電所（太陽光、風力）2か所で2千300キロワット
- ・現在は原子力発電所が停止しているので、全電力の86%を火力発電所が担っていて、ここ西条発電所もフル稼働している。

隣の部屋には、タービンが展示してありました。タービンはいわばカザグルマ、羽根車です。勢いよく水蒸気を吹きつけて回します。このタービンに発電機が繋がっています。展示はタービンだけで、発電機の展示はありませんでした。

その後ボイラーのある建物に入りました。手すりが暖かいなあと思っていたら室温計が47度を示していました。職員の方の話ではこの季節はまだましなほうで、夏場はもっと暑くて大変とのことでした。ボイラー室の小さな窓を開けて内部を見せてくれました。内部はオレンジ色の火が燃えていて熱そうでした。

たが、気圧が低いので窓を開けても熱風はこちらには出てきません。それでも建物内は暑くて、階段を上って屋上に出たときには風が気持ちよくてほっとしました。屋上からは発電施設だけでなく、石炭を運ぶ船や港、貯炭サイロや石油タンク、排ガスの処理設備、それらをつなぐ太く長いパイプ群など敷地全体がよく見渡せました。ついでに遠くの山々や海の眺めを楽しんだ後、発電所を後にしました。

午後は西条市のひうち会館でランチを食べておしゃべりした後、うちぬき2か所（弘法水と、うちぬき公園）を見学しました。地下水も味わいました。そして2時過ぎには西条を出て、途中周ちゃん広場で買い物をして帰りました。天気も良く楽しい1日でした。



6月例会報告

K, K

6月3日に6月例会をしました。フリートークということで、皆がそれぞれ思っていることを話し合いました。親子のあり方、介護、電力事情、等々。7月例会の予定などいろいろ案を出して、後は詳しく調べてから決定するというお開きになりました。

川祭り与世界平和

S. M

1999年(平成11年)に眞民先生から和紙(巻紙)に太字の毛筆で書いた手紙が届きました。

記念の500番目の碑を重信川の上流に建立したいので、ついでには酒だる村の大山祇神社の見える処に鳥居があり、その左横あたりに建立させて頂けたら、光栄この上ないと思っております。

碑の文字は

河鹿鳴く 重信川の川上に
われの詩魂は
とわにとどまる

私のもっとも残したい歌です。

毎年6月13日、川祭りを行ってきましたし、今年もお世話になりますが、もし建立をお願いできましたら、この日に建立除幕式を皆さんとやりたいと念じております。直接お伺い申しいろいろお話申さねばなりません、老齢(91才)御ゆるし下さいませ。

尊崇する木花開邪姫のゆかりの重信川源流に建立できましたら、この上ない喜びです。よろしく願い申し上げます。

上記のような旨の手紙でした。そして後日、眞民先生・奥さま・お嬢様がお越しになり、場所を決めて帰られ、500番碑の建立となったのです。そして平成11年6月13日、全国から110人が参加され除幕入魂式が行われました。その日は眞民先生の琵琶の音色にひかれて、カジカがよく鳴き、緑陰の風に先生の白髪がたなびき、荘厳な感じでした。

あれから15年が過ぎました。15回目の川祭りを酒だる村の草刈りをして、ひだまり(ピンピンコロリの会)の皆さんと一緒に御酒・スイカ・野菜などをお供えして、世界平和と皆の健康を祈願しました。

2008年には中国のお嬢さん達も来て一緒に祈願した後、キャンプ場でバーベキューを食べ乍ら、心を開き情報交換をしたり、古い日本の着物や文化に興

味を持ち、私の小鼓を打ったりして楽しいひと時をすごしました。

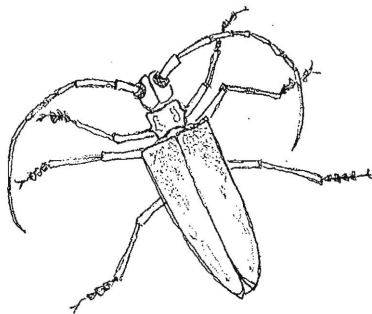
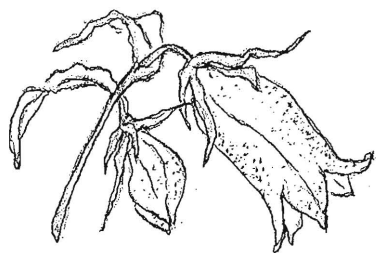
思いおこせば川祭りには、自然を愛し重信川を守りたい人達が今まで大勢参加して下さいました。今後いつまで川祭りをする事ができるのかとの思いもあります。元気な体を与えてくれた両親に感謝してささやかでも続けられる間、頑張っていきたいと思ひます。

さて5月13日、くらしの学習会で西条火力発電所へ見学に行ってきました。福島第一原発事故以来、安全神話は消え廃炉が終わるまでには30年～40年かかる原発より、火力・水力・風力の方がより安全で地球にやさしい電気エネルギーだと気づいたのです。

原発事故から3年がすぎましたが、いまだ、放射能が人々の生活に深刻な影響を与え、子供達も大地を制限なくかけめぐる事もできないのに原発再稼働にむけて膨大な資本がつき込まれています。伊方原発も例外ではありません。人間の造ったものに絶対安全というものはない、最終処分もできないものを増やし続けてどうするのでしょうか。森羅万象に対する畏れも敬意も払わず、すべて人間の力やお金で解決できるというおごりが、このような事故を招いたのです。伊方原発沖にはA級活断層があるのですから、子供たちのためにも原発を止めるまで声をあげていくべきだと思います。原子力災害を防ぐにはただ一つ、廃止するしかないのです。

次に昨今、安部政権が狙う集团的自衛権の行使容認への動きが活発になってきました。これは憲法9条を骨抜きにして、日本を「海外で戦争する国」につくりかえようとしています。どんな戦争にも正義はないのです。罪もない、憎しみもない人達が殺し合うのだから、戦争だけは絶対にしてはいけません。平和憲法を守り、再び戦争の道へ走らないための政策はないものかと小さな心を痛めております。

まだ間に合ううちに原発ストップ・平和憲法を守り少しでも健全な国土を次世代に渡すという信念の政治家は現れないのでしょうか。最後に私達は天皇・皇后の平和憲法にたいする熱き思いを真摯に受けとめて、守りたいと思ひます。



2014年5月24日(土) 脱原発を訴えた講演会「原子力発電所という機械」を聞いてきた。2011年10月、福島第1原発事故半年後「放射能汚染の現実を越えて」の講演会にも参加、あれから2年7か月、小出氏は基本的に前回同様「子供達をどう守るか」「大人の責任」について訴え続けていた。

2011年の講演会では、※当日配布されたレジメより※

原子力発電所とは歴大な温排水により海水を約7℃上昇させ、放射能や化学物質を海に捨てる”海温め装置“であると。

チェルノブイリ事故や広島原爆と福島原発事故の放射エネルギーを比較し”大気中に放出されたセシウムは広島原爆の470発分。日本では一般人は年間1ミリシーベルト以上の被曝をしてもさせてもいけない法律があるが、人々が普通に生活する場が放射線管理区域(20ミリシーベルト以内)以上に汚れてしまったと。

住民は被曝による健康被害か、避難による生活の崩壊のどちらを選ぶのか。

小出氏の願い①子供を被曝させない。理由*子供は放射線感受性が高い*何より子供には原子力を選んだ責任がない。②1次産業を守る

食品の汚染を徹底的に調べ汚染の度合いごとに「60禁」「50禁」「40禁」「30禁」「20禁」「10禁」と仕分け、子供には汚染の低いものを汚染の高いものは大人が食べる。※「10禁」だと10歳以下は食べてはいけないと言う事最後に自分に加えられる危害を容認できるか、あるいは、罪のない人々に謂われのない危害を加えることを見越すかはだれかに決めてもらうのではなく、一人ひとりが決めるべきこと。と結んでいた。

2014年の講演会では、※当日配布されたレジメより※

原子力発電所は効率の悪い蒸気機関であると。

原発事故後原子力推進派が取った対策①原発は機械である。機械は時に事故を起こす。原発を動かしているのは人間である。人間は神ではない。時に誤りを犯す。小さな事故から大きな事故まで様々な事故が起きるし、どんなに願ったところで破局的事故の可能性は消えない。破局的事故は「想定不適當」と烙印を押して無視することにした。②それでも破局的事故発生の可能

性を否定できない原子力推進派は、原子力発電所や核燃料施設を都会に作らないことにし、過疎地に押しつけられた。

それでも破局的事故は起きる。福島原発事故 今、進行中。

事故は収束していない。2011年3月11日に運転中だった1号機2号機の炉心はすでに抜け落ち、それがどこにあるかすら分からない。ひたすら水を注入してきたが汚染水が溢れている。果てしない放射能の封じ込め作業と労働者の被爆（下請けの下請けの……下請けに雇われた労働者は低賃金よりも低賃金で働いている）すでに大量に放出された放射性物質により今現在、そして今後も続く住民の被爆。事故時運転していなかった4号機には使用済み燃料プールの底に広島原発1万4000発を超えるセシウム137がある。

セシウム 137汚染の世界への広がり。偏西風により大気中に放出された放射性物質は太平洋に流れた。IAEA閣僚会議に対する日本国政府の報告では大気中だけで広島原発 168発分としているが小出氏はその2～3倍放出したのではないかと話された。

死んだ人はいないと言うけれど『原発4ヶ先で爆発 警官は「逃げるしかない」と90人置き去りにし患者45人死亡』の新聞記事や畜産農家が続けなくなる事を悲観し自殺した人もいる事を紹介。

囲われたまま死んだ家畜、牛舎から逃がした”野牛“の群れ、野犬などの写真を紹介

去るも地獄 残るも地獄。国が帰還せよと言っている地域では1年間に20ミリシーベルトの被爆をしてしまう。それは放射線業務従事者として職業的に放射能を取り扱う大人に対する基準である。被爆は微量でも危険であり汚染地域に残れば身体被害を受ける。被爆を避けようとして避難すれば、生活や家族が壊れてしまい、心が潰れてしまう。

国がやろうとしていること。基準を決め（1kg当り 100ベクレル）それを超えたものは排除、それ以下なら安全。が、小出氏は安全基準を決めてもゼロではないのだから安全とは言えないと。

子供を被爆から守るための方策★本当は避難★サマーキャンプなどの疎開★校庭・園庭の土の剥ぎ取り（除染→移染）★給食の材料を厳選する。

食べ物への向き合い方☆食品の汚染を徹底的に調べる☆汚染の度合いごと

に「60禁」「50禁」「40禁」「30禁」「20禁」「10禁」と仕分けをする☆子供には汚染の低い食べ物を食べさせる☆汚染の高いものは大人が食べる。

忘れさせようと策謀。今止まっている原発を「安全性を確認して再稼働させる」と言い、さらに新たな原発を建設し、「世界の原子力技術」を使って原発を輸出すると言っている。今進行している悲劇を少しでも小さく見せることが必要だし、福島原発事故を忘れさせようとしている。

歴史の巨大な流れ。かつての戦争時、大多数の日本人は戦争に協力した。騙されたと言いつける人もいる、大本営発表しか流れなかったし戦争を止めることは誰にも出来なかった。国家によって殺された人もいた。しかし、ごく普通の人々が戦争に反対する人を非国民と呼び村八分に殺していった。福島原発事故が起きた今、私たちがどの様に生きるか未来の子供達から必ず訪われる。

伊方原子力発電所は日本最大の活断層中央構造線の上であり伊方原発の北側の海には巨大に割れ目がある。

中央構造線の活動度。石鎚山脈北縁西部の川上断層から伊予灘の佐田岬北西沖に至る区間が活動すると、マグニチュード8.0 程度もしくはそれ以上の地震が発生すると推定され、その際に2-3m 艇殿右横ずれが生じる恐れがある。

(中略) この区間は今後30年の間に地震が発生する可能性が、わが国の主な活断層の中ではやや高いグループに属することになる。

疲弊させられた地域。原子力発電や核燃料施設を喜んで受け入れた地域はない。過疎に苦しみ、地方財政が困窮し受け入れざるを得なかった。そして、一度受け入れてしまえばそこから抜け出ることができない。次々と交付金、補助金に頼る事になった。麻薬患者が麻薬から抜け出せることは容易ではない。しかし、いつまでも麻薬に依存し続ける事はできない。

大切な自己責任。子供達を守ってあげたいのではない。今、子供達を守らないなら私は自分自身を許せない。と結んでいる。

小出氏は伊方原発1号機の設置許可の取り消しを求めた訴訟(1973年)で原告側の証人となり、1979年からイツツ(八幡浜)のアラメや土を調査し続けている。そして、来年定年を迎えられるそうだ。(A.Ⅱ)

ジャコウアゲハ

5月に入った頃からジャコウアゲハが見られなくなった。狭い庭一面に春の草花が咲き始めた3月下旬頃には、越冬した蛹が羽化し、時折飛んでいるのを見かけていた。食草のウマノスズクサは数センチ位しか伸びていなかった。その後成長してきたものの今度はジャコウアゲハがいなくなった。6月中旬、例年だと今年2度目の羽化がはじまる頃なのに・・・

不思議なことに他の蝶も飛んでこない。時々モンシロチョウを見かける程度。

蝶類の異変を感じる。一昨年10月、借りていた近くの60坪の畑を返した。その後の1年間は仮の駐車場になり今は更地になっている。この60坪の畑に育っていた野菜・花・雑草などの植物がなくなったことがその原因の一つのように思える。今、家の周りにはウマノスズクサが何か所にも根付いている。季節ごとに手入れをする個人の庭では、蝶を育てるのは難しく無理なのかもしれない。

くらしの学習会が2001.8に「蝶のくる庭」の本を、2005.6に「蝶の絵はがき」を作成したのをきっかけに我が家で実践してみようと思ひ立ち、2006年から庭で食草のウマノスズクサを育てはじめ今日に至っている・・・が・・・

その間、ジャコウアゲハの飛ぶ季節には観察した様子を「井戸端だより」で報告し、写真を撮り、そのまとめとして2011.7～8には市内3か所で「蝶のくる庭」のパネル展を開催した。2010年頃が蝶との出会いが一番おおい時期で庭に出るのが楽しみだった。戯れながら高く舞う姿、近寄って来ては優雅に飛ぶ姿・蜜を吸う姿・卵を産み付ける姿はいい被写体だった。

「井戸端だより」の記事を読み返してみた。蝶のくる庭づくり、ジャコウアゲハの飛ぶ団地を思い浮かべていた。9年近く小さな生き物とふれあう事で感動と喜びを味わうことができた。

ウマノスズクサだけは育っている。いましばらく育ててみよう。

(S.K)

千 年 椿

M. D

「夏河を越すうれしさよ手に草履」これは灘中学の入試に出されていた俳句である。蕪村が生母の里で詠んだもので、河とは丹波の野田川であったことが、この地に来て奇しくもわかった。京都から早朝乗り継ぎ乗り継いでタンゴ鉄道で野田川駅へ。

天の橋立を目の前に生い育たれた方より、与謝野町に千年椿がある、と聞きネットで調べ、是非行かねばと、雨降りしきり中であつたが、その方の出迎への車に乗せて頂き、ちりめん街道も何も横目に、一路山中「滝の千年ツバキ公園」を目差した。いわゆる千年も生きたまさにご神木。そこに行く”参道”の両側には椿並木がようこそと、美しい笑顔で出迎えていた。更めてこの地与謝野町は、かの鉄幹、そして与謝蕪村と縁深い地でもあることを、頭のどこかに思い出していた。他に多くの文人の句碑歌碑が数多見られた。

次第に私の胸は早鐘のように打ち始め、千年という時間の長さを、捉えようとしていた。やがて山間部に分け入る。全く^{ひとけ}人氣はない。数十年前までは、この一帯はよく開墾された棚田で、水田耕作が盛んに行われていた。田を耕す牛がこの椿の幹に繋がれることもあつた。この集落の西には、中世期の城跡もある。千年にわたりこの老樹は村人の暮しを、見続けて来たのである。

村人ら椿の種より食油得る親しき生活記されてあり

あ、あれだ。それとわかる高さほぼ十米、枝張り十三～十四米、幹周三、二米、樹齡千二百余年。対面の時が来た。

はるかより見上ぐる椿の全容や樹齡二千の紛れなき威厳

濃紅の花であるため黒椿とも呼ばれている。照りも美しい濃緑の葉の中に、中振りの可愛い花を、惜しみなく至る所に咲かせている。

濃紅の花を無数に咲き出だし緑照る葉に老ひの影なし

年々歳々この営みは^{とど}絶えることはなかつた。その生命力、原種ヤブツバキとして世界最古と、学術調査により鑑定された。幸い小雨になった。畏敬をもっておもむろに近付いて行った。京の都千二百年。弘法大師制定の遍路八十八

ヶ所が千二百年。その間じっと、この一本の椿は此処に立ち尽してきたのである。豪雨の日も、日本海よりの厳しい風雪に何千回であろう耐えてきたのである。誰れが植えたものか、偶々そこに一つの種が落ちたものなのか、知る由もないが、この樹は青々と繁茂を続けた。恐ろしい落雷に老幹は真二つに割け、ベルトや巾広いチェーンでしっかりと補強されている。代々樹木医が懸命に保護してきたものであろう。京都府指定文化財である。

私達の訪ねた一週間後には、盛大に椿まつりが。勿論この千年椿があつての与謝野町の一大イベントである。紅白の幕が広々と周囲に廻らされ、恐らくはその中に立入ることは相成らぬであろう。主人と私は恐れ多くも至近距離で、否お咎無きを幸いに、その幹に触れ、両の手をいっぱい広げ、その生の鼓動を直に聴かんとした。

風雪に耐へて星霜千余年ここに立ちたる椿に触るる

奇蹟、そう言ってもいいだろうか。少し離れて四方より仰いでは眺め、見飽きることはなかった。次第にこの奇蹟が解かってきた。先ず種子の落ちた地形が幸いであつた。ゆったりとその周囲が防風林となっており、又程良い傾斜は、椿木には恰好の水捌けの良い土壌であつたこと等。往時村人はこの椿の下に憩い、赤い花を賞でてやまなかつたことであろう。その種子を何箇所か見つけて、戴いてきた。幾片かの落椿は地にありてなおその生彩を失わず、凜とした輝きを放ってやまなかつた。その愛しき崇高さは限りもなく、奇蹟の花と掌にいただいた。

落椿地にある姿もとのひて千年変わらぬ^{れいな}紅の濃さ

この時語るに言葉もなく胸中はいっぱいであつた。別れの時自ずから頭が下がった。いつまでも永遠に立ち尽くしていてくれることを祈る。心の奥底からの悲願であつた。

まことに生涯で稀有な回合であつた。

手に包む落椿の紅あせず幾日なお赤々と千年の血潮

その日よりどんなに小さな^{ひら}葉にも、幼い芽や苗にも、人知の及ばぬ底知れぬ生命があることを、時として思うようになった。

与謝野町へのオマージュとして、幾つかの句歌の碑を記します。

・千年の心つなぎて黒椿

稲畑汀子 椿文化資料館前

・見も聞きも涙ぐまれて帰るにも心ぞ残る与謝のふるさと

僧 与謝野礼巖（鉄幹の父）

・飛ぶ雲に秋の日ひかりそのもとに大江の山のもれるうすべに

与謝野鉄幹

・いと細く香煙のごとあでやかにしだれざくらの枝の重る

与謝野晶子

・ふるさとの我が松島に比べ見む朝霧晴れよ天の橋立

落合直文



父の誕生日



T. M

6月7日は父の89歳の誕生日だった。2年前の87歳の誕生日祝いから、両親と二世帯住宅に住んでいる弟が企画して、主役の父と、母、弟夫婦、妹夫婦、私達夫婦の合計8人が集まって1泊2日の誕生日祝い旅行を実施している。初回は淡路島、去年は浜名湖、そして今年は京都だった。

朝9時ちょっと前に、私達は愛媛から車で京都に向かい、途中昼食休憩などをとったが、比較的順調に2時ごろには着くことができた。弟達も名古屋からワンボックスカー1台で6人が乗り合わせて、ほぼ同じ頃着いた。

京都御所蛤御門のまん前に位置するホテルは、広大な京都御苑を眼下に望み、落ち着いた環境にあった。部屋からカーテンを開けて下を見たら、人力車に乗った花婿・花嫁が門前で記念写真を撮っていた。

今回京都では素晴らしい再会もあった。実は、今年3月に京都で研究会があった折、帰りの夜行バスを待っている間に、幼友だちのFちゃんに連絡を取り、京都駅で会った。その時6月に家族と来ることを話したところ、私の親兄弟にも会いたいから、必ず一緒に自宅（京都駅の近く）に来てくれと言われたのだが、首尾よく今回その再会が果たされることになったのだ。ホテルから、弟の運転で母と弟の妻、私の夫、私の5人がFちゃんのお宅にうかがうことになった。

Fちゃんのお宅は、京都駅と今回のホテルの中ほどに位置するいわば京都の町の真ん中にあり、表は大通りに面しているのだが、門を入ると奥まった家屋まで、手入れの行き届いたお庭の置き石の上を歩いて入っていくため、意外なほど落ち着いた静かなところだった。ご主人も同席されて、和やかな雰囲気の中、昔話に花が咲いた。Fちゃんが、子供のとき、弟と私と3人で、母が作ってくれたおにぎりを持って歩いて名古屋城まで行ったことがあったと話してくれたが、私も弟も母も全く覚えていなかった。昔住んでいた場所の話、そのあたりの人々の今、小学校時代の先生の話など、次から次へと話題が絶えない。夫と、弟の妻はFちゃん、ご主人とは初対面のはずだが、全く違和感なく、夫もご主人が同い年だとわかると親しみがわいたようで、同世代の話ができた。母も記憶力全開で、次から次へと今まで聞いたこともない昔話が出てくる。お宅の居心地の良さと、会話の楽しさで、あつという間に時間が過ぎ、ふと時計を見ると父の誕生祝いの宴会の時間が迫っていた。名残惜しく、去りがたい気持ちを押さえ、Fちゃんご夫婦と別れ、ホテルに戻った。

6時頃から父の誕生祝いの宴が始まった。全員お酒好き、話し好きで盛り上がった。父の始めの挨拶が長くて、隣の母が注意するという場面も見られたが、父にしてみれば、また今年も皆無事集まり祝福してもらえたことが嬉しかったのだと思う。1年1年の重みをかみしめながら、私たちも全員健康で今年もこの日が迎えられた喜びをひしひしと感じた。毎回している寄せ書きも全員の方が集まった。今回も事前に母から電話で、お祝いは少しいいからお金でね（これは父のお小遣いになる）、ホテル代、宴会の費用などはすべて自分たちが持つからということだった。子どもとして申しわけないと思う一方、経済的にも精神的にもゆとりのある親の存在が、本当に有難く、自分たちもこのようになりたいと思った。

宴会の後は、両親の部屋に全員集まったの二次会だった。今回うちは、夫がチャレンジしておいしくできた椎茸の含め煮と缶ビールを少し持参、弟はビール、日本酒とおつまみを持ってきてくれたので、また飲みながらの話しが続いた。椎茸は大好評だった。12時過ぎまで話は尽きなかったが、主役の父は途中でベッドに入り熟睡、私達は次の日の事を考え適当に退散して、それぞれの部屋に戻った。

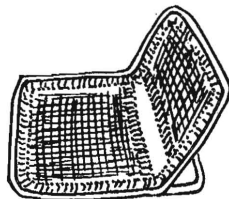
次の日は、朝6時過ぎに弟が散歩に誘いに来たが、まだ着替えをしていなかったのも、先に行っていてと送った後、夫と急いで身づくろいをし、出発の準備もして、6時半ごろから京都御苑を散歩した。広い！御所は月曜から金曜まで事前に許可証をもらったら

見学できるとのことだが、日曜日だったので、所詮無理だった。しかし、忙しい日常から離れて、のんびりゆったりした時間を過ごすことができた。先に行っていた弟とも合流し、3人で話しながら7時ごろホテルに戻り、そのまま朝食会場へ。さすが京都！朝から湯豆腐が出た。お漬物もおいしかった。

8時半ごろホテルを出発し、次の目的地父の郷里奈良県北葛城郡王寺町へ向かった。今回父のたつての希望に、皆に自分の郷里を見て、両親のお墓参りをしてもらいたいということがあったので、それを実現すべく、全員で奈良県を目指した。直接山の上にある祖父母のお墓へ行き、お参りの前に、全員でお墓の草引きをした。梅雨の合間の晴天で、暑かったが、みな一生懸命お墓掃除に励んだ。父は男3人、女6人、9人兄弟の上から3番目で、上の二人は既に亡くなり、父の兄の娘が結婚して、婿が養子となり父の実家を継いだ。その娘が数年前に亡くなり、養子は今も大阪の方に住んでいるので、父の実家は無人で閉まったままになっている。お墓参りは、近くに住んでいる父の妹や弟がたまにしてくれているという状況だった。この日も父の二番目の妹がお花を買ってきてくれて、末の弟（うちの夫と4歳しか違わない）が吉野から駆けつけてくれた。私たちが久しぶりに叔父叔母に会えてうれしかった。きれいになったお墓で、叔父のお経で全員お参りし、父の望みを叶えることができた。すがすがしい気分だった。

そのあと、叔母叔父も一緒に山の上にある、眼下に法隆寺を望むことができる眺望のいい料亭で素晴らしい料理をいただいた。叔母は父より6歳下だが、まだ車も運転するし、全く年を感じない若々しさに驚いた。こんな機会でもないと、愛媛からはなかなかここまではこられない。私が子供の頃、JRに勤めていた祖父が毎年夏休み名古屋まで迎えに来てくれたことを思い出した。奈良は私の心の故郷でもある。いい機会をもらったことに感謝の気持ちでいっぱいだった。

年々弱っていく親を見ていると、将来の自分たちの姿を見る思いである。親は自分たちのお手本である。親の姿から見習うことは多くある。そして、親があってこそその親孝行だという思いを強くする。今回も親にお金を出してもらっての集まりだったが、そこにやりくりして参加することが今は親にとっても自分たちにとっても大切な時間なのだと思う。できるだけ長くこの時間を持ちたいと最近強く思う。そして、息子達が我々の姿をお手本だと思えるような存在になれるよう、日々精進していかなければならないと、今回のこの機会に心を新たにした。



母の夢

数ヶ月前、夜中に激しい腹痛に襲われ、何か悪い物でも食べたかなと思いつながら、トイレに座ると血便が出た。ちょっと不安になったが、お腹をさすりながら布団に入るが、キリキリとしぼり腹になり、又トイレへまた血便、朝になる迄待ち息子に電話して様子を話した。九時迄に浦岡病院へ連れて行ってもらい大腸検査をしてもらうと「虚血性結腸炎だから直ぐに入院して治療しましょう。」ということになった。心の準備も出来ていないし、入院準備も出来ていないので、息子の嫁にすべて世話になって入院生活が始まった。

医師の説明によると、年寄りに多い動脈硬化から腸の血管が細くなり破れた時に血液が漏れて腹痛となるといわれた。私の場合は「全部が切れてなかったので、大量出血にならなかったが、切れていたら失神してトイレで死んでいたかもしれないんだよ。」何と怖いことだったと、自分の体でも分らない事ばかりだと考えていると体に赤信号が点いた様な気がした。

それからの治療は、午前と午後に2時間ずつの点滴、朝昼夕の食事はおもゆにスープ、お茶に牛乳と水物ばかり。これでは元気になれないかもと心配しながら三日が過ぎた。点滴の種類が変わってから、夜になると7.5度位の微熱が出て、胸がドキドキしてしんどい。様子を看護師さんに話すと、熱冷ましの飲薬を出してくれたり冷えピタをもらったりして、やっと眠る事が出来た。

うとうとしていると、五年前に亡くなった母が、「病気はどうぞね」と見舞に来てくれた。驚いて「ありがとう」といった途端に消え夢だったんだと思ったが、しばらく母の思い出に自分の生き来た道の長さに感謝した。

強烈な思い出は、四歳位だった。何かやりなさいと命令された時に「ハイハイ」と言ったら、ご飯を炊いていた時に持っていた火箸（金物）でおしりをおもいきり叩かれた。痛くて痛くて泣いたが、それからは、親に二重返事はした事ないし、口返事もしなくなった。

(S2. K)

それからしばらくして卵を買いに行った時 10 この卵を紙袋に入れてもらったので嬉しくて走って帰っていると、何かにつまずいてこけて卵はぐじゃぐじゃ。叱られると泣きながら帰ったのに、母は大きな井鉢に全部移し殻だけ除いて、卵ごはんと卵焼きにした夕飯となった。今度は嬉し涙を流しながら美味しかった卵の味が忘れられない。

高校大学と松山迄汽車通学だったので弁当を作ってもらい、「時間がない」と言うのが私に食事をしていて長い髪を三つ編みにしてくれた日々もあった。母の愛情だし育っていく娘の成長が嬉しくてやっていたのかもしれない。

結婚して二年目に父親が亡くなったので、共働きの私は、困ったら母親に頼って助けてもらった。今の様な産休がない時代、子守さんが見つかる迄と里に子供を預けて務めが出来たのは有難かった。又働きながら姑を看ていた時は、姑が病気になるば私は休むことが出来ないのので里から呼び寄せて姑の世話もしてもらった。

今に残っている言葉は、「あんたがすべき事が出来ないから代わりにしてあげているのよ」母としては姑の世話も娘可愛さからだったと思うと今でも頭が下がる。九十五才で交通事故に遭って三ヶ月入院した時は、五人姉妹が、朝昼夜と交代で看護し「やっぱり女の子でよかった。」と言ってくれたがどの子にも同じ愛情を注いで育てていたのだから皆、思いは同じ、母の愛情への恩返しと、母と子の絆がそうさせたと思う。三ヶ月で退院し、九十九才迄頑張ったのに肺に水が溜まり二週間程の入院で天国に逝ってしまった。母との思い出は尽きない。

古い時代の母親は、自分を犠牲にして子供に愛情を注いだが、今は子育ては保育園に何とかスクール、塾へと他人に育ててもらっている様な気がする。自分の子は自分で育て、社会に役立つこんな子に育てましたと言える母親になって欲しいものである。自己反省でもあるが・・・。



短歌

A・N

八雲たつ出雲の国の松江にもコンビニ並ぶ町並みのあり

中海に浮かぶ小島の牡丹花大橋架かり境港へ

美保関古謡に謡ふ安来節立ち木の松に害を被る

宍道湖に「嫁ヶ島」在り白潟に公園整備夕陽スポット

出雲には医学部広く平野部に時代の流れ今に知るかな

不思議な体験

身近な人との縁を振り返ると、そこには何かしらの不思議な繋がりがあると感じている。ずーと以前に夢に出てきて話したような人だったり、自分の空想の世界に現れていたり。日ごろの生活でも、あれっ、これっ、以前にも同じようなことがあったなあとか、感じたことがあったなあとか、同じような風景だったり、出来事だったり。その不思議さを身近な人に話すと「人生も折り返しになると、自分自身は忘れてるけれど、それは空想でも夢でもなく実際に会ったり話したり見たりしたことを忘れてるにすぎない」と。

私の不思議だなあと思っていたことが、現実に戻されてしまった。そうかあ、忘れてしまっているのか。でも、私自身の感覚は、そんなはずはないというほうが勝る。不思議な体験はずーと以前からあったから。それまでも、空想の話や夢の話人を人に言ったことがないから、今更それを話しても受け止めてもらえないはずもない。それは、その時の不思議な感覚でしかなく、その時は忘れてしまっている。次にそれを思い出すのは、前と同じだと感じる時なのだから、頻繁にあるわけではなく、忘れたところに現れる。

夫との縁もそうだった。

母方の実家に、長期休暇中にはよく預けられていた。祖母の家は、高台からの朝焼け夕焼けの景色が実にきれいに見える場所にあった。自分で食事が作れるような年ごろまで、確か10歳位だと思うが、そのころまで、休みは祖母の家で過ごした。祖母は何でも作る料理の達人のような人で、ヤギのお乳でチーズのようなものをつくり、酵母を作って、かまどでパンも焼いてくれた。また、性格も穏やかで、家族の中で、一番優しいと思う人である。

その年は例年より雪が多く降り、学校が始まる日になっても、私は祖母の家に留まっていた。8歳の私は、一日中、高台から下方を眺めながら、迎えを待っていたように記憶している。その年から、迎えに来るといいう日が近くなると、毎日下方の家を眺めて、色々空想の世界を広げるようになっていた。迎えが来るのか来ないのかということから始まり、下方の家の人のことも想像するようになっていった。夫との結婚が決まり、8歳の私が見た下方の家に夫の家族が住んでいたこと、それは私が10歳のころまでだったことを聞いた。私が何を空想したのかはここには書けないが、不思議な縁を感じずにはいられなかった。

雪で学校に行けなかった年は、昭和38年の豪雪であったそうだ。

(M・T)

雑感

梅雨に入り、各地で記録的な大雨が被害をもたらしています。

絹糸のように細かい雨がしとしとと街並みを濡らす梅雨の風情が無くなってしまったようで寂しい限りです。

それでも、綾南川対岸を包む霧や、遠くにかすむ山並みの姿は美しく、町はヤマボウシやドクダミの白い花に紫陽花が彩りを添えています。

庭を薄紫に染めていたニワセキショウ、マツバウンラン、キキョウソウ、ヒナキキョウソウ、ヒナギキョウが終わりに近づきました。今年は黄花のニワセキショウも沢山見ることができました。

庭のあちこちで、ネジバナが下の方から順に色付き始めています。

庭を訪れるチョウやトンボも日増しに数も種類も増えています。

池では数を増やしたメダカの傍で大小様々なオタマジャクシが泳ぎ、トノサマガエルやツチガエルが顔を出しています。スイレンの花の陰では黄緑色の大きなヤゴも姿を見せてくれました。小さな池ですがミズスマシ、アメンボ、ゲンゴロウなど、沢山の生き物が仲良く棲み分けています。

お向かいの柿の木ではモズのヒナが大人しくお留守番をしています。裏の木立ではウグイスが、遠くではホトトギスが、川原ではキジが啼いています。時々、オオルリらしき歌声も聞こえる様になりました。

我家の前の水路は改修が終わり、コンクリート製の U 字溝が埋め込まれました。そのせいか、今年はホタルが見えません。改修工事を免れた裏の水路近くでは、毎晩、数匹のホタルが舞っています。部屋の電気を消し、北側の窓辺で暫くホタルを楽しむのが日課になりました。

水路の傍には大きなクヌギが有りました。昨年春にはミツバチが分蜂途中の大きな蜂球を見せてくれました。かつてはこの家にも数個の巣箱が置かれていたそうです。その木も切り倒され、今はシイタケの椀木と薪になり、切り株近くからは新しい命が芽吹き始めています。

4年前の秋、そのクヌギのドングリを我家の庭に植えたものが今は 1 m 位になりました。大きくなるのを楽しみにしています。

“安倍内閣が4月に閣議決定したエネルギー基本計画をつくる際、国民に意見を募った「パブリックコメント」で脱原発を求める意見が9割を超えていた可能性があることがわかった”という記事(朝日新聞 5/25)を見ました。パブリックコメントを募ったことすら知らなかったことはとても残念でした。それ以上に、“経産省はその意見をほとんど反映しないまま、基本計画で原発を「重要なベースロード電源」と位置づけた。”と知り愕然としました。“民主党政権が2012年に「30年代に原発稼働ゼロ」決めた方針を白紙に戻し、今回の基本計画で原発再稼働の方針を明確にした安倍政権の茂木敏充経産相は、原発への賛否を反映しなかったことについて2月の国会で「数ではなく内容に着目して整理を行った」と説明した。”とのことですが、“脱原発の理由では「原発事故が収束していない」「使用済み核燃料の処分場がない」。原発の維持・推進を求める声は「運転コストの安さ」が理由だった”と言います。内容に着目したという答弁に説得力は有りません。

最近になって存在が明らかになった、福島第一原発事故当時の所長、故吉田昌郎氏を政府事故調が聴取し、一問一答方式で残した「吉田調書」。所員の9割に当たる6500人が吉田所長の待機命令に違反して10km南に有る福島第二原発に撤退していたという事実から、いかに大変な過酷事故であったかが判ります。放射能の怖さを熟知していればこそその行為だったのでしょう。しかし、そのせいで対応が遅れ、指揮系統が混乱しました。

人間は必ず失敗する可能性があるし、機械は故障・事故の可能性がります。事故発生時、制御できず、3年以上経っても収束すらできない。除染も不可能に近い状態が続き、汚染水は増え続けトラブルばかりです。

事故が起きなくても廃棄物の処理が出来ない。

こんな代物を稼働し続けることに怖さを感じないのでしょうか。不思議でたまりません。

そんな時、現役官僚とされる若杉冽著「原発ホワイトアウト」を読みました。小説としての文章の面白さには欠けましたが、原発を存続させたい政官財の構図を垣間見ることが出来たような気がしました。

国益と私達一人一人の幸せは別物の様です。

安倍内閣は原子力規制委員 5 人の内 2 人を交代させる国会同意人事案を衆参の議院運営委員会理事会に示し、6 月 10 日衆議院、11 日参議院に於いて自民・公明両党賛成多数で承認されました。今まで審査が厳しいとして業界からの批判のあった島崎邦彦委員長代理(地震学)を再任せず、田中知・東京大学教授(原子力工学)―元日本原子力学会長―を任命することになりました。田中氏はかねてより“原発は必要”との立場で業界とのつながりが深いとされている人物です。これで、一気に再稼働へと向かうのではないかと案じられます。

5 月 21 日福井地裁は関西電力大飯原発 3, 4 号機をめぐる運転差し止め訴訟に対し、運転差し止めの判決を出しました。

判決文は大飯原発の安全技術と設備は、確たる根拠のない楽観的な見通しのもとに成り立つ脆弱なものだと結論付けています。「生存を基礎とする人格権は法分野において最高の価値を持つ」、「発電の手段でしかない原発はそれより低く置かれるべき」とし、「新規制基準への適合ではなく、福島事故のような事故を招く具体的な危険があるか」を判断基準として挙げています。そのうえ、国が定める事故時の防災重点地域は 30km 圏内(それすら住民避難の計画が充分には進んでいない)だが、人格権を侵害される具体的な危険は 250km 圏内に及ぶとし、原発の安全対策の甘さを厳しく批判しています。

ちなみに綾町は川内原発、玄海原発、伊方原発の 250km 圏内に入ります。東温市は伊方原発、島根原発の 250km 圏内です。

「原発停止は国富流出につながる」という考え方についても「豊かな国土に、国民が根を下ろして生活していることが国富だ」と断じています。

関西電力は 22 日名古屋高裁金沢支部に控訴。菅義偉官房長官は「原子力規制委員会の規制基準に適合すると認められた場合には再稼働を進める政府方針に変わりはない」。原子力規制委員会の田中俊一委員長は「司法判断について申し上げることは無い。大飯については我々の考え方で審査していく」と述べています。

この発言をどう受け止めればいいのでしょうか。

司法の判決など意に介さない傲慢な態度に思えて仕方が有りません。

一昨年だったでしょうか。延岡で開かれた京都大学原子炉実験所 助教小出裕章氏の講演会を聞く機会がありました。その時、小出氏の、「原発は発電効率が悪い。その上、常に冷却し続けなければならない。その冷却水に海水を使うため、原発は巨大な海温め装置に他ならない。」という言葉が忘れられませんでした。そんな時、TBS の《報道特集》で、“原発が停止して3年。原発周辺の海の環境が好転し始めている”という内容の特集を見ました。原発が稼働している時は藻場が荒れ、魚介の棲家が奪われていたのに、現在、少しずつ藻場が復活し始め、魚や貝が戻り始めているというのです。

夢だと思われ巨費を投じ続けている核燃サイクルも齟齬ばかりが目立ち、稼働の見通しは有りません。

使用済み核廃棄物は処理できません。

存在するだけで、環境をじわじわと破壊しています。

そんな原発からは卒業すべきです。

次世代のエネルギーを論じるのも大切ですが、先ず、電力を身にまとい、電力を食べているような現代の生活様式を見直す時が来ているように思えてなりません。

現在、世界中でおきている紛争は、少なからず、形振り構わないエネルギーの争奪戦とそれから派生する格差に起因しているように思えます。

数年前、友人に勧められて読んだ 内山節著 「清浄なる精神」。先日読んだ 田中優子著 「鄙への想い」。グローバリズムよりローカリズムを、という著者たちの気持ちは、私の胸の奥深くに沁みこみました。

小さな集落で必要最低限の生活が確立することのまともさ、競争に勝つことを生きがいとし勝ち負けだけが価値基準となった愚かさ。

納得できましたし、今まで胸の内でモヤモヤしていたものに明確な答えを得ました。

相手の文化を尊重する心の中にこそグローバリズムは存在すべきです。

お正月、新聞紙上で、昨年 12 月に成立した“特定秘密の保護に関する法律”を受けて詠まれた永田和宏氏の短歌 2 首を知りました。「見逃せし誤植のごとき居心地の悪さにふたたび法案を読む」。「特例と言ひて許さばやすやすと言ひかえられて先例となる」。

それ以来、朝日歌壇に目を通すようになりました。

最近心に残った歌です。

福島市のかたの「ほろほろと木通(アケビ)の花のこぼれいて空き家はずつと空き家のまんま」。

磐田市のかたの「身に過ぎる気高き理想掲げ来て我等がものに終に成し得ず」。

短い言葉から伝わる想いの重みに圧倒されました。言葉を大切にしなければ、と改めて思いました。

このところ、インターネットを介した事件が相次いでいます。

パソコンの普及のおかげで私達の生活は考えられない位便利になりました。私自身、鳥、昆虫、草木の名前を調べる時や写真の整理に、手放せないものになっています。

しかし、ラインと呼ばれる無料通話・メールアプリや様々な SNS(ソーシャルネットワークサービス)に若い世代は翻弄されているように思えることも少なくありません。特に、中高生たちは既読スルーを恐れて睡眠にすら罪悪感を持つことがあると言います。

ネットバンキングでは多額の被害が出ています。

遠隔操作による事件も有りました。

検索エンジンを経営する代表はインタビューに答えて、そもそもコンピューターとは遠隔操作するものであるし、ウェブサイトのプライバシー保護規定は順次すべてが公になる様に変更されているし、公になった方が良く、と発言していました。

毎日のように使用する検索エンジン。右下隅に“プライバシー保護について”という言葉が有るのは知っていても、内容を詳しく読んだことは有りませんでした。便利さと危険は隣り合わせです。

今年度から、綾町主催の生涯学習講座を受講することにしました。

年間 1000 円の登録料で、いくつでも受講できます。ジェンベというアフリカの楽器、綾町らしい竹細工、など 33 の講座が有ります。

私は、子供のころから中断しながらも細々と続けていた“書道”と綾町照葉樹林文化推進監 河野耕三氏と共に綾を歩く“綾の自然と文化を楽しむ”の 2 つの講座に申し込みました。“綾の自然と文化を楽しむ”は以前から興味がありました。しかし、幼い頃からの度重なる怪我で、10 年前の検査で膝の靭帯はちぎれかけ、軟骨はほぼ皆無、度重なる出血で関節囊には関節鼠、と診断され、爆弾を抱えた膝なのでほぼ諦めていました。

自治公民館で続けている体幹トレーニングに誘ってくれた知人は昨年
から“綾の自然と文化を楽しむ”に参加しています。彼女が「大丈夫だから」と背中を押してくれたので、思い切って申し込みました。

6月9日、書道教室の初日でした。

4年半のブランクは想像以上で、横線 1 本にてこずる始末でした。それでも、25 歳の若くて可愛い先生の褒め上手な指導と、東温市で指導してもらっていた友人の励ましとアドバイスで何とか続けられそうです。

6月12日。いよいよ“綾の自然と文化を楽しむ”に参加です。当日は、役場裏の駐車場に集まり、数台の車に分乗して目的地に向かいました。今回は、車道傍の法面の植物の観察が主体でしたので、私でも十分に付いて行くことが出来る所でした。山肌から水が滲み出している所には宮崎県の固有種、ヒュウガアジサイが可憐な薄桃色の花をそこここに咲かせていました。カギカズラの可愛い黄色い花とそれには似つかわしくない鋭い棘にあっけにとられ、ニワトコの紅い実を口にし、ムサシアブミの大きな葉に驚き、ムクロジの実をこすって泡立て、葉が直接生えているようなイワタバコを不思議がり、少し色づき始めたイヌビワや沢山の蕾を付けたウバユリに再度の来訪を願い、萩の花と間違えたコマツナギを眺めながら、最後は推定樹齢 350 年のホルトノキを見学。倒れた巨樹は添え木に支えられ手
当分の痛々しい姿ながらも雄々しく立っていました。その近くでは赤い茎のタブノキや絶滅危惧種のハナガガシの幼苗にも出逢えました。本当に楽しい半日でした。足を鍛えて皆勤したいものです。 (K. O.)

ヘルパーを9年続けて、今年辞めた。とたん脳が眠ってしまった。何とか脳に刺激を与えようとまず行ったのが「サイエンスカフェ」。喫茶店でお茶とお菓子を食べながら天文や地質の話を聞いた。

次に行ったのは「タンポポ説明会」。今、全国でタンポポの外来種と在来種それぞれの分布や、雑種の状況を調査している。サンプルは多いほどいいので、協力者をつのっているとのことだ。見分け方などいろいろ説明を聞いて、後日私も何か所かでタンポポを採集して送ってみた。

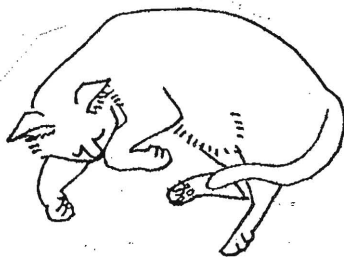
面河山岳博物館にも行った。他に来館者がいなかったのもあって学芸員さんが、展示していたニホンヒキガエルをつまみ出して、詳しい生態を説明してくれた。同じ大きさのウシガエルと比べたら、体の割に脚が細くてあまり跳ばない。毒腺を持っているが出すのは見たことがない、頭を低くして威嚇することはある。ここに展示しているヒキガエルはもうオジイサンガエルで、いつもじっと座っている。いちど新しい個体に取り替えたら、そのカエルは外に出よう出ようとして困ったので、またこのオジイサンガエルに座ってもらった、とか。1時間位説明してくれた。

帰りの山道で、偶然に同じ種類のヒキガエルに出会った。手のひら位の大きさがあつた。仲間を背中に乗せていたが、説明にもあつたとおり脚力は弱そうで、一歩進むのに5秒から10秒位かかっていた。私達3人が取り囲んで見ているなかを、長い時間かけて道の端まで歩いて行き、前脚が空を切つたそのままの姿で川に落ちていった。サイエンスはいつも発見、いつもワクワク。

次回7月例会は19日(土曜日)10時に中央公民館集合。

山之内方面に行きます。

参加希望者は林さんまで連絡してください。



くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610-5-21026

問合せ先 TEL/FAX 089-964-6956

E-mail: kt-hayashi@nifty.com